

XII. 寺山遺跡採集の弥生土器について

1. はじめに

ここで紹介する土器は、昭和49年3月に青沼弘氏が寺山遺跡（遺跡登録番号46015）内で採集した（註1）ものであり、詳細な出土状況、共伴遺物などは不明である。現在は瀬峰町教育委員会で保管している。

瀬峰町内では大境山遺跡（註2）で中期後半の円田式、後期の踏瀬大山式、岩石Ⅰ遺跡（註3）で後期の天王山式の破片が出土しているが、遺構は確認できず町内における弥生時代の様相は不明といわざるを得ない。寺山遺跡採集の弥生土器は瀬峰町内で出土した遺物の中で最も残存状況が良好であることから資料紹介を行い参考に供したい。なお、本稿は故阿部正光が作成した実測図をもとに佐藤信行と安達訓仁で検討し作成した。



第44図 寺山遺跡の位置と
弥生時代後期の遺跡 (1/50, 000)

2. 採集遺物について

はじめに採集した土器の特徴をまとめ、次に類例から編年上の位置づけについて検討を行なう。

(1) 特徴

【器形】 全体の約3/5が残存するが、底部は欠損している。器高18.3cm以上、口径16.6cmである。器形の特徴は体下部から体上部にかけて緩やかに外傾し、体部中央付近のやや上部よりわずかに内傾して頸部に至る。体部最大径は体部中央付近よりやや上にある。頸部から口縁部に向かいやや強く外傾する。頸部と口縁部の境はケズリ調整により軽い段を持つ。狭い口縁部はわずかに肥厚する。口縁部は不規則で僅かに波打つ。口唇部は断面四角形である。特徴から器形は甕である。

【調整・文様】 外面では口縁部がナデ調整であり、口唇部平坦面にはL R縄文が横位施文される。頸部から体下部にかけて横方向に幅1.5～1.8cmの幅広なケズリ調整される。ケズリ調整に顕著な砂粒の移動痕跡がほとんどなく、器面は滑らかである。これは器面が生乾きの時点での調整を示唆する。下部にL R縄文が縦位か斜位回転で横位施文されたのちにナデ調整される。このため、縄文原体はつぶれ気味となる。また、上部のケズリ調整された部分にも部分的にL R縄文の痕跡を観察することができる。調整の新旧関係から外面の調整・施文の順序はナデ調整↔縄文施文（→ナデ調整）→ケズリ調整である。

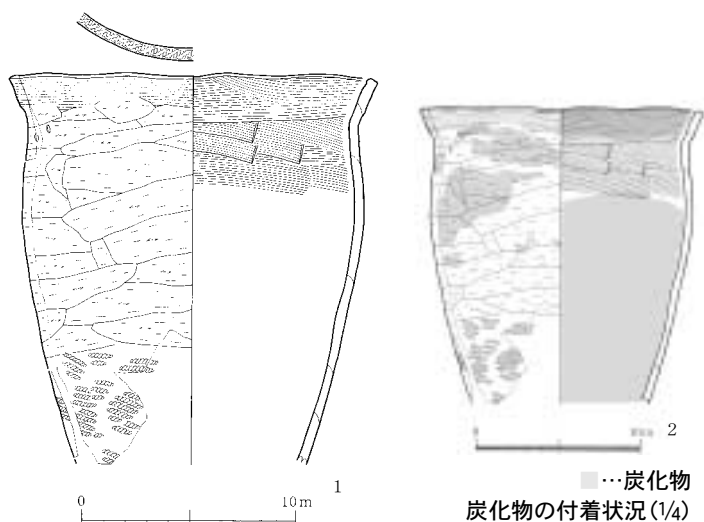
内面では口縁部は横ナデ調整である。体部は横方向のナデ調整で、下部は炭化物付着のため確認できない。

【色調】 外面は褐灰色（10YR5/1）～にぶい橙色（7.5YR7/4）、内面はにぶい橙色（7.5YR7/4）である。

断面でみると上部ではにぶい黄橙色(10YR7/3)で下部では黒褐色(10YR3/1)である。胎土には石英を若干含んでいる。

【そのほかの特徴】 頸部よりややさがった位置に径0.4cm の穿孔が2個ある。孔の間隔は2.8cm である。孔の周辺を観察すると断面形は鼓形ではないため1方向から開けられたものである。孔はこの2個のみであり、その中間に口縁部から体部にかけての割れ目があることから補修のための孔と考えている。

また、外面と内面のほぼ全面に煤状の炭化物が付着する。口縁部の外面や体部の内面の一部など部分的には厚く付着する(第45図2)。



第45図 採集遺物



寺山遺跡採集の弥生土器



口唇部の縄文



補修のための孔



体部の調整痕跡

図版15 採集遺物

(2) 編年上の位置づけ

本資料には沈線文や刺突文といった狭義の編年上の位置を推定する明確な特徴に乏しい。また、全体的に特徴が類似する資料も極めて少ない。そこで、本資料の特徴をまとめ、宮城県と隣県の類例と比較する。

本資料の特徴は次の4点にまとめることができる。

- ①体下部からゆるやかに外形して立ち上がり頸部から口縁部にかけてくの字状に外反する甕。
- ②無文の口縁部は幅が狭く口唇部には縄文をもつ。
- ③横位の幅広いケズリ痕が頸部から体部下半にかけてある。
- ④体下半のケズリ痕の下方にL R縄文が\か↓回転の横走縄文が施される。

口唇部に縄文を施文するのは東北地方の弥生前期から終末までの土器に確認できるが、口唇部に縄文を施文する肥厚口縁という特徴は後期の天王山式(註4)を中心に前後する時期に多くみられる。天王山式期の複合・肥厚口縁には沈線文、刺突文をもつものと縄文・撚糸文のみのものがあり、無文のものは少ない。口縁部の幅が狭く無文のものは天王山式のうちでは古い段階、またはその前段階に類例がある。天王山式の後半ではむしろ口縁部が広くなる傾向がある。類例は後期では名取市清水遺跡明神田地区焼土状遺構下層出土土器(第46図4)(註5)、仙台市下ノ内浦遺跡7層出土土器(第46図5)(註6)のほか、中期中葉では岩手県水沢市橋本遺跡出土土器(註7)などにわずかにみることができる。天王山式では体部の最大径が体部下半にあるものが多く、本資料では体部上半にある点で異なる。橋本遺跡では前述の特徴に加え、頸部から口縁部にかけての器形が類似するものがある(第46図1)。

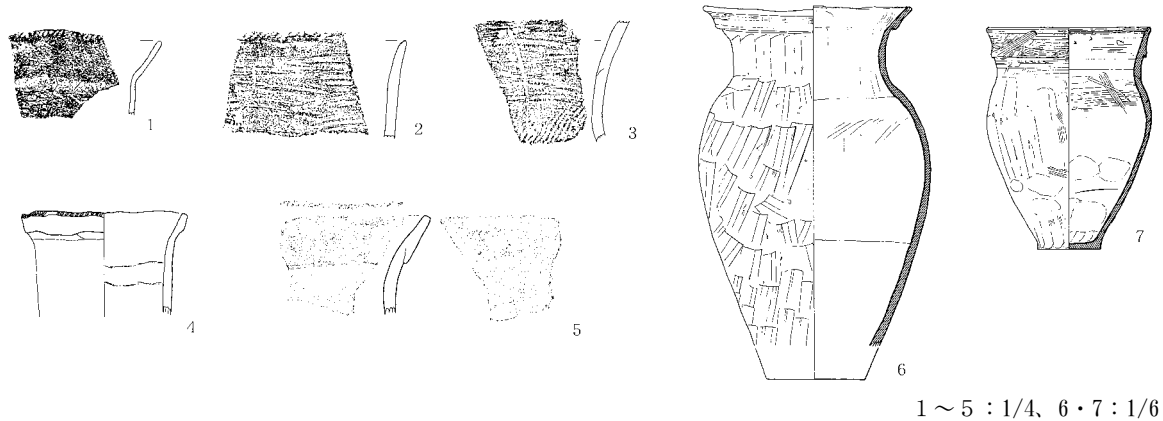
本資料の最大の特徴は体部上半にケズリ調整を残すことであるが、宮城県内の天王山式期では顕著にみられるものではない。ケズリ調整は初期段階の器面調整技法のひとつとして一般的なものであり、表面の場合その後に行なわれるミガキ、ナデ等の最終調整によって、通常ではあまりその痕跡をとどめないと考えられている。古墳時代以降の土器器種では多くの器種で観察できるが、弥生土器でも確認できる例があり、中期前葉では仙台市中在家南遺跡出土土器(註8)、中期中葉では橋本遺跡出土土器、後期では岩手県江刺市兎Ⅱ遺跡出土土器(註9)、仙台市富沢遺跡第24次調査Ⅶc層出土土器(註10)、富沢遺跡第104次調査6層出土土器(註11)、福島県いわき市八幡台遺跡1号住居、2号住居出土土器(註12)などがある。

ケズリ調整が施される器種は、橋本遺跡で甕、壺、高坏、蓋とほぼ全器種に及ぶが他の遺跡ではほとんどが甕のみである。施文調整部位は兎Ⅱ遺跡で体中部、橋本遺跡、八幡台遺跡では全面に及ぶほかは底部付近にわずかに残存する場合が多い。方向は兎Ⅱ遺跡では横位であり、そのほかの遺跡ではいずれも縦位である。また、八幡台遺跡で確認できる全面にケズリの痕跡のみを残す無文の甕の一群(第46図6、7)は特徴的であり、ケズリ調整以外に装飾やほかの調整を残さないことは成形ののちケズリ調整だけを行なうという土器作りの省力化を示すものと思われる。橋本遺跡では口縁部から体部上半にかけて条痕状の荒々しい横位のヘラナデ痕を残す例がある。さらに口唇部と体部下半に縄文を残すなど本資料に通じるものがある(第46図2、3)。

ケズリ調整が施される例をみてきたが天王山式前後の時期にケズリ調整は多くはないが一定量存在している。しかし、それらは体部上半よりも下半または底部付近に多く、施文方向も縦方向が一般的である。本資料は最終調整に近い段階でケズリ調整されることは調整技法の手段としてではなく装飾的な効果をねらったものと考えている。

3. まとめ

年代がわかる明確な特徴がなく、類例が少ないため編年的な位置づけに苦慮するが、総合的に判断すると寺山遺跡採集の弥生土器は天王山式系のうちでは後半よりもその前段階または初期段階に位置づけられる可能性がある。また、本資料を特徴づけるケズリ調整は装飾的な効果を意図したとみられ、極めて特異な例である。今後、類例の増加を待って検討を加える必要がある。



- 1～3：橋本遺跡出土遺物
4：清水遺跡明神岡地区焼土遺構出土遺物
5：下ノ内浦遺跡7層出土遺物
6：八幡台遺跡第1号住居出土遺物
7：八幡台遺跡第2号住居跡出土遺物

第46図 宮城県内と隣県の類似する弥生土器

註

- 註1 瀬峰町教育委員会1985『がんげつⅠ遺跡第3次調査』瀬峰町文化財調査報告書第5集、6頁の註3に記載がある。宮城県教育委員会1972『東北自動車道関係遺跡分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第27集、22-23頁では大鰐谷南向遺跡としてアメリカ式石鏝の採集を記載している。また、瀬峰町教育委員会1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集、6頁の註5では古館遺跡とする。これらは同一の場所で現在の寺山遺跡と考えている。なお、現在アメリカ式石鏝は所在不明である。
- 註2 瀬峰町教育委員会1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集、228-232頁。
- 註3 瀬峰町教育委員会1985『がんげつⅠ遺跡第3次調査』瀬峰町文化財調査報告書第5集、19-20頁。
- 註4 坪井清足1953「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生式文化の性格—」『史林』第36巻第1号、50-63頁、史学研究会
- 註5 名取市教育委員会1982『清水遺跡神明岡地区』名取市文化財調査報告書第11集
- 註6 仙台市教育委員会1996『下ノ内浦・山口遺跡—仙台市高速鉄道関連遺跡調査報告書V—』仙台市文化財調査報告書第207集、80-125、416-420頁。
- 註7 佐藤嘉広・伊藤博幸・池田明朗・佐々木千鶴子 1995「岩手県水沢市橋本遺跡出土資料について（補遺）」『岩手県立博物館研究報告』第13号、27～48頁、岩手県立博物館
- 註8 赤沢靖章1996「中在家南遺跡出土の弥生土器について」『中在家南遺跡他 仙台市荒井土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書 第2分冊 分析・考察編』仙台市文化財調査報告書第213集、105頁、仙台市教育委員会
- 註9 仙台市教育委員会1988『富沢遺跡第一24次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第113集
- 註10 仙台市教育委員会1999『富沢遺跡第104次調査発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第235集、35-36、125頁。
- 註11 岩手県埋蔵文化財センター 1979『兔Ⅱ遺跡 主要地方道一関・北上線関連遺跡調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター調査報告書第8集
- 註12 いわき市教育委員会1980『八幡台遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告書第5冊